

ワヤン・クリ (wayang kulit) は、動物の皮で作られた人形に光を当て、白い布に映し出された影を動かしながら演じる影絵芝居である。影絵芝居はマレーシアだけでなく、インド、中国からトルコに到るまで世界の広い地域で演じられているが、東南アジアでは特にポピュラーであり、マレーシア、インドネシアでは共にワヤン・クリと呼ばれている。

マレーシアにはいくつかのワヤン・クリがあるが、そのうち最も多く上演され、人気があるのが、ワヤン・クリ・シナムである。シナム(タイ)のワヤン・クリという名が示す通り、タイ南部と東海岸北部クランタン州で、主に農村の娯楽として演じられてきた。最近ではワヤン・クリ・クランタンと呼ばれることもある。

ワヤン・クリはダランと呼ばれる人形遣いと、数名の音楽奏者によって演じられる。ダランは全ての人形を一人で操るだけでなく、唯一の語り部でもある。書かれた脚本はなく、あらすじに従って即興で会話を作りだす。それぞれの登場人物にあわせて声音を変え、いかにテンポよく、面白い会話を繰り広げるかはダランの腕(口?)にかかっている。人気のあるダランの公演では、スクリーンの前に陣取った観客から笑い声が絶えない。

伝統の影絵芝居に衰退の波 イスラム化政策の圧力も

ワヤン・クリは農村部で非常に人気のある娯楽で、1960年代後半に調査を行った研究者によると、当時はクランタン州だけで300人以上のダランがおり、人気のあるダランは、稲の収穫が終わってから雨季に入るまでの「ワヤンの季節」には、木曜日とラマダン月を除く毎日どこかから招待を受けて上演を行っていたという。しかしダランの数は年々減り続け、政府機関の調査では、80年代初めには40人を切り、現在では10数名残るだけになっている。

映画やテレビなど新しい娯楽の流入が衰退の理由として挙げられているが、1991年から始まった州政府による実質的な上演の禁止も、その傾向に拍車をかけている。クランタン州は1990年の総選挙でPAS(全マレーシア・イスラム党)が政権の座に返り咲いた。PASが率いる州政府は、様々な「イスラム化」政策を打ち出したが、そのうちの1つが州内における芸能の

知識探訪

多民族社会の横顔を読む



【第11回】

戸加里康子

(一橋大学大学院社会学研究科)

マレーシアのワヤン・クリ

上演の見直しだった。ワヤン・クリは上演前、上演の安全や大入りを祈願して土地の霊に供物を捧げたり、儀式のようなことが行われていたが(今でも行われることがある)それがイスラム的でないとされ、ムスリムの演じ手や観客には認められないとされたのである。

以降州内の公の場における上演には基本的に許可が発行されないことになっているが、そうはいつ



ても完全に禁止されてしまわないところがマレーシア的であり、州都コタバル市にある文化センターやホテルなどでは「観光客向け」の上演が続けられている。また州内にある中国寺院やタイ寺院などで奉納として演じられる際にも許可が発行される。その際演じ手や観客にムスリムがいないこと、という条件がつくこともあるが、実際に取り締まることはなく黙認されているようである。

近年連邦政府機関などの主導により「非イスラム的」とされる要素を排した新しいワヤン・クリを作る動きもあるが、昔から親しんできたこれまでのワヤン・クリに対するダランたちの愛着は強く、積極的に応じていこうとする人は少ない。村での上演は依然として禁じられたままであり、ワヤン・クリを巡る状況は厳しいといえる。

【執筆者プロフィール】1969年名古屋生まれ。一橋大学大学院社会学研究科(地球社会研究専攻)博士後期課程に在籍中。NHK国際放送ラジオ・ジャパンマレー語放送ディレクター、マレーシア日系企業勤務などの後、大学院に戻る。専門はマレーシア地域研究。ワヤン・クリなどクランタンの芸能を中心に文化政策が芸能に与える影響やイスラムと伝統芸能の関係を考えてみたいと思っている。著書に『旅の指さし会話帳15マレーシア』。